
神造世界のルーチェ

しょぼん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神造世界のルーチエ

【Nコード】

N9987W

【作者名】

しょぼん

【あらすじ】

事故にあつた少女は異世界に転生した。そこは魔術があり、迷宮のあるファンタジーな世界。ある日、幸運に恵まれ魔術書を手に入れた少女は、独学で魔術師への道を歩んでいく。

——例え、進む先に何があろうとも。

【二週目プレイは難易度UPがお約束 少女の割と泥臭い異世界ファンタジー！】

第一話

人生どう転がるかなんて、きつと誰にも分からない。

一年後、一週間後、もしかしたら一秒後には死ぬかもしれない。

それはとても怖いことで、多くの人を挫けさせる難問だろう。

だけど。

それでも、私は生きていく。命の続く限り、生きていく。

今生きているというこの奇跡を、絶対に失わない為に。

ティアロストという村がある。聖炎王国ヴァルフレアの首都遠くにある、主要な街道からも外れた40世帯程しかない、小さな、いや極少規模の村だ。正直、村と呼んでいいのかも疑問だが、少なくともそこに住む人たちが名を付け村と呼んでいるのだから、村なんだろう。

とにもかくにも、ルーチェは12年前にこの村で生を受け、それからずっとこの辺鄙な村で生きてきた。一度も村を出ることもなく、ずっとだ。

旅行に出れるような資産家ではなく、加えてルーチェは母親であるクレアとの二人暮らしだったから、寂れた街道を歩いて半日近くかかる隣村のデイルゾンまで、幼いルーチェが向かうことなど許されなかった。

まあ、それも納得できる。この世界には危険が多いのだから。

「混沌の日」という物がある。数年、もしくは数十年に一度、この世界のあちこちにある魔界の入り口「カズム」から、急激にその数を膨れ上げた魔物の群れが地上に進軍するという、恐ろしい現象だ。

それによって現れた魔物は大概の場合、各国が全力を挙げて打ち滅ぼすのだが、何しろ膨大な数の魔物だ。討ち漏らしという物は当然出てくる。戦線から逃げ延び、あるいは突き進んで人々に害を為

す存在が。

6年前の混沌の日。ルーチェの父親もそれで死んだ。この村に現れた一匹の魔物を倒す為だった。

いや、父親だけじゃない。他にも3人の男手がこの時に亡くなり、彼らは死後この村の英雄になった。とは言っても、その恩恵など遺族への人当たりが良くなったという、ただそれだけの物だったのだが。

全く、酷い話だ。

ルーチェの家は他と違い大きめで、二階があつて宿屋を営んでいる。主にデイルゾンの村に泊まれなくなった人を客層にしているのだが、そのお陰でギリギリながらも生活はしていける。服だつて一年に何度か買っているし、たまには甘いものだつて食べられる。

しかし他の家はというと、男手を失くした事で生活はギリギリ所かボロボロだ。村の住民も罪悪感があるのか、たまに食糧の差し入れ位は各自しているようだが、金銭援助はされていない筈だ。その所為で彼らは清貧を通り越した生活をしている。本当に酷い話だ。

とにかく、話が脱線したが、世界は物騒なのだ。魔物の生き残りがいるかもしれないし、盗賊だつて現れる。そんな世界から守られるように、ルーチェはクレアに大事にされてきた。

「愛情を持つて、のどかな村で健やかに。小さいけれど幸せな生活がここにはある。それつてとっても幸せな事なのよ？」

実際にそのような事を口にした事もあつたし、クレアの生き方はそんな言葉を体言しているかのようなのだ。

「けど、そんな生活は退屈すぎるよ」

早朝。宿屋の自室でベッドに横になりながら、呟く。ルーチェは常々そう思っていた。

「のどかな暮らしとか、素晴らしいよね」とルーチェも思う。でもそれは「都会で疲れた生活を自然で癒して貰いましょう」的なたまの娯楽だから良いんであって、一生涯を其処で生きて生けるかと言ったら、ルーチェには無理だ。

飽きが来る。というか、ルーチェは既にこの生活に飽きていた。ルーチェだって「こんな事を思うのは薄情かな」とか思ってる。思ってるけど、無理。無理だ。

（いい加減無理。だってまだ若いし、お年寄りじゃないし、第二の人生華々しくとは言わないけれど、もうちょっと文明レベルの高い所に生まれたかったし！）

「……初めから、何もしらなければ良かったのかな」

そうすれば、この村で暮らす事に何の躊躇いも疑問も抱かないで、この村の誰かと結婚して、お母さんに、お婆ちゃんになって幸せに死ねたのかもしれない。

でも、知っているんだからしょうがない。そんなのは生産性の欠片もない、言っても仕方がない事だ。

「事故で転生した先は、ファンタジー世界の田舎村でした、かあ」

天井を眺めながら、何かを掴むかの用に手を伸ばして呟く。

そう、ルーチェは普通の村娘ではなかった。前世の記憶を持っていた。

ルーチェの前世はヴァルフレアなんて存在しない、こことは違う世界の小さな島国だった。その国は資源こそなければ、その技術力で先進国と認められる高度な文明を持った国だった。

様々な学問が充実していて、義務としての教育が受けられた。物

理法則を解き明かしたお陰で、この村からすればまるで、魔法のよ
うな事が当たり前に出来る道具がありふれていた。

ルーチェ自身も、昔の記憶に曖昧な所も多いが、進学校と呼ばれ
る一般よりも、より難しい教育を施される学校に通っていた。それ
が前世のルーチェの自慢でもあった。自分は特別だと少し思ってい
たりもしていた。

けどそんな事は今、何の役にも立たない。

数学が出来たって、歴史の年号を覚えていたって、各種文法をす
らすらと答えられたって、それがこの田舎生活で何の役に立つとい
うのだ。所詮専門的なレベルまで受けていない私の知識は、しょせ
ん日常生活の無駄知識。その枠を出れないのだから。

「本当、後悔って後になってから悔いるんだよね。私もせめて、
工業高校にいったら何か変わってたのかも」

前世の自分なら絶対にしない選択を呟く。ルーチェはくすりと笑
った。

（さてと、そろそろ仕事をしないとね）

ルーチェは仕度を整えると外に向かった。先ずは今日使う水を井
戸から汲んでこないといけない。季節はもうじき秋になる。過ごし
やすい気候だ。

ルーチェは自分と同じ位の大きさの荷車を引いて、村の中央にあ
る井戸を向かった。途中、何度か村の住人とありきたりな会話をし
て辿り着く。この村には井戸が一つしかなかった。その為、村人は
皆ここに水を汲みにくる。

どこの家庭も沸騰させてから使うだろうが、そのまま飲んでも案
外大丈夫かもしれない。水質は良いようだ。それには村人全員の協
力の結果という面もあるだろう。

普段は蓋がしてあって、枯葉や虫が入らないように気をつけている。けどその為に、蓋をし忘れたり、井戸水を汚すようなことをした場合は大変だ。

ずっと前、子供がここにおしっこをした時には、その両親が村中の人に頭を下げて回った。彼らは殊勝な態度で頭を下げ続けたが、何度も怒鳴られて胸倉をつかまれた謝罪訪問だったという。勿論ルーチェは少し可哀想に思ったので、彼らが自分の家に謝りにきた時謝罪を受けるクレアの横で微笑みながら、内心で「死ぬ」と思うに留めておいた。大人の対応だ。

少し話しがずれた。とにかく、水は大事だということだ。そして、曲がりなりにも宿屋を営んでいるルーチェの家の場合、必要な水も多くなる。

ルーチェは二回に分けて木樽に汲んだ水を家に持ち帰ると、宿屋中の掃除を始めた。全てが終わると昼ごろになっていて、簡単な昼食をとる。硬いパンと卵焼きだ。塩は余りかかっていない。節約の為だった。クレアと話をしながら取る昼食の時間はすぐに終わった。

「じゃあ、行ってきます」

「はい、行つてらっしゃい。夕暮れまでには帰るのよ？」

「分かつてるってば」

お決まりの文句だ。ルーチェは家を出た。ルーチェの仕事は掃除までで終わり。後は自由時間だった。

この時間、他の暇な娘たちはお喋りをしたり、村長の家で受ける事の出来る裁縫仕事などをしたりするのだが、ルーチェは散歩がてらに野草などを取って帰る事が多かった。

頭の出来は割といいと自覚しているルーチェは、教えられた野草を見つける事は得意だ。だが手先の器用さには余り恵まれなかった

ようで、凝り性にも拘らず出来が遅く見栄えの悪い物しか作れなかったのだ。

腰帯にナイフを差し皮袋を持って、獣道を歩きながらルーチェは自嘲する。

（こんなんだから「女の子らしくない」とか言われちゃうんだよね。容姿もお父さん似だから、不細工ではないと思うけど、地味だし。お母さんに似れば良かったなあ。お母さんは綺麗な金髪だし。胸も大きいし）

歩きながら、ルーチェは自分の胸に手をやった。ふくらみのない胸だ。成長期だというのに、成長する気配がない。

髪 of 長さも肩までで揃えている所為で、たまに外から来た人からは少年と間違えられることがある位だ。

「あーあ、嫌になっちゃうなあ」

何か面白い事でもないかな。呟きながらルーチェは道を進む。そうして日が暮れ始めたのに気づいて帰宅した。

帰宅すると、宿泊客がいる事をクレアが告げた。珍しい、月に1〜2回の出来事だ。

宿泊客は2人だという。クレアに頼まれたルーチェは、更なる水を求め井戸に向かった。お客さんがきた時は、宿屋自慢の簡易シャワーが派手に使われる為に水の消費量がぐんと上がるのだ。ちなみに他の家に簡易といえでもシャワーなど存在しない。濡らしたタオルか水浴びで済ませるのが一般的だ。

ルーチェはまた二回に分けて、荷車で水を運ぶ。重労働だ。これは後で大好物のココアを請求してもいいんじゃないか。そんなことを考えながらルーチェは働いた。

食事の準備や宿屋の主人としての仕事はクレアがこなすので、ルーチェの仕事は裏方となる。クレアとしては娘がお客さんに粗相をしてしまう可能性よりも、頭の悪い客が娘に手を出す可能性を危惧しているらしい。

（それはないと思うんだけどな。もうちょっと成長した後ならともかく、今のこの少年体型じゃ魅力もへったくれもないような気がするし。ああ、ロリコンっていう可能性もあるのか。いや、この場合ハショタコン？）

くだらない事を考えながらもルーチェは追加の仕事を無事終わらせた。途中、食事を取るために降りてきた宿泊客とすれ違った。丁寧な礼をして自室に戻る。宿泊客も目礼をして台所に向かった。

宿泊客は二人組みだった。鈍い銀髪の壮年の男性と、黒髪のまだ少年と言ってもいい容姿の若者だ。親しげでありながら妙な距離感を持っているように感じさせた彼らは、一泊すると翌日の早朝には旅立っていった。

ルーチェは見送りにだけ顔を出すと、いつものように仕事に取り掛かる。水を汲み、掃除を始める。そこで気づいた。

宿泊客のいた部屋。その壁とベッドの隙間に何かが落ちていた。腕を伸ばし、それを掴み取る。そこにあったのは、一冊の魔道書だった。それも、初心者用の教本だ。

「……嘘でしょ？」

この世界はファンタジーだ。魔界がある。魔物がいる。そして、何よりも「魔術」がある。この世界の魔術というのは御伽噺の中のものではなく、きちんと確立した技術として存在している。

そう、誰にでも使える「技術」としてだ。

とはいえ、その教育には酷く時間と金がかかると言われている。

その為、魔術師になるのは民衆を守る義務のある貴族や、一部の金持ち、世捨て人位だ。だから学ぶ機会もお金もなく、クレアを見捨てて村を出る気もないルーチェに、そんな機会は存在しなかった。だが、そこに憧れがなかったと言えば嘘になる。いや。嘘になるどころか、大嘘だ。

（憧れていた、憧れていたとも！）

ルーチェは思わず飛び跳ねた。

（だって前世の世界でもあり得ない秘術だった存在が、この世界では現実の物なんだから。そりゃあ使ってみたと思っていたよ。でも諦めてたんだ。それなのに、それなのに！）

「『千載一遇のチャンス』って、こういう事をいうのかも」

ルーチェは呟くと、魔道書を流し読みする。そこには様々な直筆の書き込みがしてあった。

それを読んでルーチェは推測する。

（これは多分、取りに戻るなあ）

魔道書自体は、それなりの本屋なら売っている。とんでもなく高い専門書だが、成人男性の月給の半分はいかないだろう。10万ギルドといった所か。ただ、こんな田舎村には本屋などない。デイルゾンの村にも多分ないだろう。そしてこれだけ使い込んでいるのだ。新しい本を買って終わり、というのも多分ない。彼らはきっとこの本を取りに来る。

ネコババするというのは論外だ。クレアが槍玉に上がるし、今思えば彼らは魔術師の師弟だったのだ。権力も持っているかもしれない

いいし、魔術だなんて超常の力を振るわれたら、たまらない。

「――よし」

結論は、出た。

ルーチェは他の部屋の掃除を後回しにすると、自室に戻り大慌てで机に向かった。そうして引き出しの中から半紙とインク。羽ペンを取り出すと大急ぎで写本を開始する。

大事そうなことや回りくどい表現は簡略化しつつ、ルーチェは満足に勉強も出来なかった今までの鬱憤を晴らすかのように、異常な速度で写本を薦めていく。腱鞘炎を起こすのではないかと思うぐらい手が疲れて痙攣しはじめたが、それでもルーチェは作業を止めなかった。

写本が3分の2は進んだ所だった。部屋の扉が叩かれた。

クレアだ。扉越しに声を掛けられる。

「ルーチェ、いる？ 何だかお客さんが忘れ物をしたみたいなんだけど、貴女知らないかしら？」

「……ああ、そういえば本を見つけたよ。今持っていくね」

「全くもう。そういう事はお母さんにすぐ言わないと、駄目じゃない。……お客さん、急いでいるみたいだから早くね？」

「ごめんなさい」

クレアはルーチェの部屋に勝手に入ろうとしない。そのお陰で娘が何をしているのかに気づかなかった。

ルーチェは名残惜しかったが魔道書を閉じると、ドアを開けてクレアに素直にそれを渡した。本当は自分の物にしてしまいたかった。

だけどそれは無理な話だ。

ルーチエは疲労によって震える手を隠しつつ、クレアの後を付いていき添え物のように微笑んで、彼らを見送る。壮年の男性が微笑み、ルーチエを見つめた。

「見つけてくれてありがとう。可愛らしいお嬢さん」

「いつ、いえ。そんなことは」

褒められた。少し照れる。

（だって「可愛らしいお嬢さん」とか、殆ど言われたことないもの。そりや照れるさ。年上の男性というのも、素敵かもしれないな……まあ「実は写本させて貰いました」何て言ったらどんな顔するか分からないけど）

それでも、殺されるような事じゃないだろう。ルーチエは微妙な笑顔で彼らを見送った。

やがて彼らの姿が見えなくなると、二人して家に入り夕食を食べる。疲れきった表情をしていたので、クレアに心配された。

そうして早々に就寝の準備を済ませると、クレアに「おやすみ」と告げる。そして自室に戻った。

疲れた。ただ、同時に奇妙な高揚感に包まれていた。今日はもう何も出来る気がしないが、明日からが楽しみだ。写す事に専念していたので、魔道書の内容は殆ど頭に入っていない。

布団の中でルーチエは、くすくすと笑った。何かが変わるようなそんな予感がしていた。

第二話

魔道書の写本を作ってから、ルーチェの生活は確かに変わった。仕事をこなす事に変わりは無かったが、散歩、兼野草採集の時間が殆ど無くなって、魔術の勉強の時間に当てられることになった。外にいる時間が少なくなった。それでも勉強は楽しくて、ルーチェは今までよりも楽しい日々を過ごすようになった。途中までは。

そう、途中まで。途中までは良かったのだ。けど途中から問題が生じた。

座学はルーチェにとって何の障害も無く進んだ。魔道書の内容はよく出来ていて、簡単な書き方をしているにも拘らず、この世界の仕組みや人間の可能性、魔界に対する考察など、とても魅力的な題材が飽きの来ないように、上手くまとめられていた。

例えば、この世界は「物理世界層」と「精神世界層」の二つからなる「多重積層構造」になっていて、物理世界層は「マテリアレイヤー」。精神世界層は「アストラルレイヤー」と呼ばれているのだとか。

例えば、人間が魔術を使えるのは「コア」と呼ばれる、魂に該当する器官から魔力を引き出す事が出来るからだ、とか。

とても興味深い事実だった。もっと知りたいと思った。だからルーチェは写本の内容を三ヶ月もしない内にほぼ理解しきったし、次の段階の訓練へと進んだ。

でも、そこからがきつかった。

それは「自覚訓練」と呼ばれるものだ。自分の中のコアの存在を自覚する、魔術師になる為の第一歩となる訓練。ルーチェはそこで躓いた。

（だって、訳が分からない。魔道書を読んでも「特殊な『魔具』」を利用した開眼が一般的な方法である。稀に瞑想や先天的に自覚す

る者も存在する」だなんて、事しか書いていない。こんなんじゃないの（来る訳ないじゃないの）

特殊な魔具。魔具とは噂に聞く、魔法の道具のことだ。魔物を倒した時に稀に残る「コアクリスタル」という物を動力源にした凄い物らしい。とにかく、そんな田舎に存在する訳がない物を利用するのが普通だとか言われても困るし。残念ながら先天的に自覚などしていないルーチェとしては、ここは原始的？ 瞑想でいくしかない。

けど無理だ。集中力には自信がある方とはいえ、年頃の娘に瞑想の経験がある筈ない。何なら道行く女の子を捕まえて「貴女は瞑想経験がありますか？」なんて質問してみればいいのだ。絶対に「NO」と返事が返る筈だから。

ルーチェは半ば自棄になつて訓練を続けた。けれど、いつまで経っても自覚訓練は進まなかった。

始の一ヶ月目はまだ良かった。二ヶ月目もまだ耐えられた。三ヶ月目はもう無理だった。目に見えてルーチェは苛つき始めた。四ヶ月目になると苛つきは逆に収まって、今度は自分には才能がないんじゃないかと自信を失いかけた。その途中の12月、ルーチェの13歳になる誕生日さえも、つまらなく過ぎていった。

そんな時だった。就寝前にルーチェは、クレアに呼び出された。食卓に座るよう促される。

「ルーチェ、ちょっと話があるの。ここに座って？」

「うん。いいけど、どうしたの？ ご飯の時に言えばよかったのに」

「それでも良かったんだけど、何だか言う時期を逃しちゃって。はい、どうぞ」

「わー、やったあ！」

温かなココアがコップに注がれて、ルーチェに渡された。高価な為に滅多に飲めないココアは、ルーチェの好物だ。

クレアは自分の位置にホットミルクを置くと、椅子に座り溜め息を吐いた。そうして、美味しそうにココアを飲むルーチェを見て微笑みながら、自分もミルクを一口飲む。

「最近ルーチェ、何だか凄く疲れてるわよね。勉強のし過ぎなんじゃないかしら」

「……そんなことないよ。全然、寧ろ足りないくらいで」

「お母さんはそうは思わないなあ」

「……何で？」

「だってルーチェは、頑張りやさんだもの」

不満そうな声を出すルーチェに、クレアは両手でミルクを飲んで、くすくすと笑った。

「ルーチェは何時だってそうだもの。要領が良いように見えて、自分で決める目標がとても厳しいの。だから一回決めたら絶対にそれを遂げようとするのよね。家の仕事だって、お母さんが頼む前から自分で『ここまでではやらなくちゃ』って決めて、少し大変でも絶対にそうしようとするじゃない。覚えてるわよ。ルーチェがまだ8歳のとき、ミールおばさんのとこの娘さんが何度遊びに誘ってきても、午前中は絶対に遊びに出かけなかったじゃない。『まだやる

ことがあるからって』。そういえばあれからあの子、ルーチェのこと誘わなくなっただなあ」

「うん」

「寂しいわねえ」と呟くクレアに、ルーチェは何も言えなかった。クレアの優しさと愛情が、ココアの湯気と共にとても伝わってきた。胸が一杯になった。

「お母さん心配しちゃったの。貴女は自分の事は自分でする子だし、言いたいことは大体言ってくるから、お母さん凄く助かってる。私達の娘はこんなに賢くて、こんなに素敵に育ってるって、お母さん毎晩寝る前にお父さんに伝えてるのよ？」

「……うん」

「だけどね、同時にすっごく寂しいの。ルーチェがお母さんに甘えてくれないのがすっごい寂しいの。だから、ね」

「うん」

「何か辛いことがあったり、悲しいことがあった時。どうしても上手くいかない時。そんな時はお母さんに話してみてもいいかしら。もしかしたらもう、ルーチェの方が頭がいいかもしれない。だけど私はお母さんだから、ルーチェの楽しい気持ちだけじゃなくて、辛い気持ちも受け止めてあげたいの」

「……ん、ありがとう」

ルーチェは俯いた。涙が出ていた。初めてといって良いかもしれ

ない。嬉しくて出た涙だった。

クレアは立ち上がりルーチェの頭を撫でると「毎回は無理だけど、またココアを作ってあげるわね」と言って部屋を出て行った。

ルーチェはもうしばらく食卓についていた。ココアが少し冷めたが、それでもとても優しい味がした。

それからというもの、ルーチェは大分落ち着いた。相変わらず訓練は進んでないが、それでも心にゆとりができていた。

水汲みや散歩で外に出かける時、村の人に会うと「大人っぽくなつたね」と言われるようになった。少し嬉しく感じて「そんな自分はまだまだ子供だなあ」と、ルーチェは思う。

相変わらずこの村は小さくて、この辺りでルーチェの知らない「場所」はきつともうないだろう。でも、ルーチェの知らない「事」はきつとたくさんある。

「だったら、こんな生活も悪くはないんじゃないかな」

ルーチェは自然とそう思えるようになっていた。そうになると、人間というのは不思議なものだ。肩の力が抜けたからか、理由はよく分からないが、少しずつ訓練が上手く行くようになってきた。

そうして年が明けて、訓練開始から5ヶ月余りが過ぎた日。ルーチェは初めて自分のココアを自覚した。大喜びだ。

その日の夜。ルーチェは夕食の時間にクレアに向かって微笑むと、告げた。

「お母さん、私、出来ちゃった」

「……えっ。なっ、何が出来たの？」

「魔術の初歩、ずっと訓練してたの。……遂に出来ちゃったのっ

！
」

「ああ、魔術ね。……魔術？」

クレアは慌てた表情を見せ、続く言葉でほっとした表情を見せる。そして何かを悩むかのような表情へと、めまぐるしくその顔を変化させた。

「うん、そうだけど、どうかしたの？」

ルーチェはそんなクレアの様子をいぶかしみ声を掛ける。だがクレアは「何でもないわ」と言い、少し困ったような微笑みを見せたあとにココアを作ってくれた。

とても暖かくて、甘いココアだった。

それからルーチェは、村での生活を前より楽しく過ごしながら、次々と訓練課程を進めていった。

魔道書を落とした客。彼らが訪れてからもうすぐ一年が経つ。

最近では自覚訓練が殆ど完璧といえるレベルになり、自身のコアの隅々まで把握したルーチェは、その付属器官である「ゲート」の訓練に精を出していた。ゲートというのはコアの一部であり、混沌と呼ばれる異界に繋がる扉でもある。魔術師はここから魔力や存在を引き出す事によって、魔術を行使するのだ。

またこの段階になると「パス」と呼ばれる「精神接続能力」の訓練も同時進行する。これが以上に難しかった。既に実践の領域だといえるからだろう。ルーチェの訓練生活はまたしばらく滞った。

けれどたまにクレアに愚痴を溢したり、村外れの森で見つけたお気に入りの広間で昼寝をしたり、そんな事で息抜きをしながらルーチェはゆつくりと、着実に訓練を重ねていった。

今日も静かな食卓で二人。ルーチエはスープを詰まらなそうに口に運ぶと呟く。

「お母さん、私って才能ないのかなあ」

「ルーチエに才能がなかったら、お母さんなんてきつとみそっかすよ」

よく愚痴を溢すようになったルーチエに、クレアはからからと笑ってそう言った。

そんな風に笑えるクレアの方が凄いいんじゃないかと、ルーチエは歳の割に美人なクレアを見て「お父さんは幸せ者だったんだなあ」と思う。

他愛無い日常がそこにあった。

季節が巡って、また冬になる。12月はルーチエの誕生日だった。これでルーチエも14歳。婚約が許される年になる。この地方では14歳で婚約が許され、16歳で結婚する者も多かった。

ルーチエにはそんな気も相手も居やしないが、ようやく大人の仲間入りという物だろう。母は誕生日祝いに、ハチミツのたつぷりと掛かったバターケーキを焼いてくれた。

「それじゃあ火をつけるわよ？」

「あつ、ちよつと待って」

ルーチエは覚えてたての魔術で世界を構成する精霊の一つ「火霊」にパスを結ぶと、ケーキに立てられた蠟燭に小さな火をつけた。目を丸くして驚いているクレアを見てくすくすと笑って、そんなルーチエを見てクレアが笑った。二人揃って訳もなく大笑いをした。

笑いが収まった所で、ようやくお待ちかねの食事の時間となった。これが、ほつぺたが落ちるかと思う位美味しい。ルーチェは何度もクレアの腕前を褒め称えた。

その日の夜、ルーチェはクレアの部屋と一緒に眠った。

いつからか、ルーチェは一人で眠るのが当たり前になっていた。

いや、自分でそう決めたのだ。

けれど、こうして誰かの体温を感じて眠るというのは、とても幸せな事ではないだろうか？

「偶には、二人で寝るのもいいね」

「お母さんはいつでも歓迎よ」

「んー、偶には、ね」

「ふふふ」

ルーチェは照れて壁のほうを向いて眠った。髪をクレアに撫でられる。優しい手つきだった。

（いつか私も、こんな風に優しく誰かの頭を撫でるのかな）

いつのまにかルーチェは眠りに落ちた。その日は夢を見なかった。夜が去ったのが残念な位、清しい朝だった。

第三話

そんな風に、慎ましくも平穏な生活が続いた。クレアとルーチェの二人暮し。穏やかに進む村の時間。

けれど、それが贅沢な物だと思い知らされる時が来るなんて。

五月の静かな夜。特別な事なんて何もない、何時も通りの日だった。ルーチェはいつも通りにクレアに「おやすみ」を告げ、ベッドに横に入る。それだけだった。

今日という一日はそれで終わりになる筈だと、ルーチェは無意識に思い込んでいたのだ。

大きな間違いだった。

深夜に突然布団を剥がされたルーチェは、腹部に感じた衝撃で目を覚ました。

「……う、ぐっ」

「黙れ、殺すぞ」

衝撃はすぐさま痛みに変わった。続いて襲ってきたのは恐怖だ。何せ人相の悪い男がルーチェを見下ろしていて、ナイフを首に突きつけて物騒な発言を囁ましてくれたからだ。

（何、一体何が。どういうこと？ 何で私の家にこんな奴が。ひよつとして……どろぼう？）

男は、痛みと混乱する思考の所為で身動きの取れないルーチェにのしかかると、ロープで両腕を後手に縛り上げ、猿轡を噛ませた。手馴れている。とんでもない早業だった。

「よし、いいか。死にたくなければいう事を聞け。刃向かったら殺す。手間を取らせても殺す。いいな、理解できるな？」

ナイフで頬をぺちぺちと叩かれて、ルーチェはベッドの上で小刻みに顔を上下に動かし、了承の意思を伝えた。男は妙に座った目でこちらを見つめているが、ルーチェの様子に満足したのだろう。

ルーチェは後ろ髪を犬のリードのように掴まれ立ち上がらされると、男に促され震えながら足を進ませた。

何が起きているのか、誰かに教えて欲しかった。

（一体何が、いや何がつて、泥棒が来たんだろうけど。そうだ、母さん。母さんは無事なの？ 村の人も、どうしよう。私どうすればいいの？）

ルーチェの思考が再び混乱しかける。戦うべきか、一瞬そうも考えた。だがこの状況で動くのは危険だ。ルーチェは冷静さを取り戻した。少なくとも、クレアの無事を確認しなければならない。

部屋のドアは開きつばなだったので、ルーチェはそのまま進んだ。玄関前に来るとそこにはもう一人の男がいた。爬虫類の様な顔の男だった。クレアもそこにいた。

ぐったりとしていて、ルーチェと同じように拘束されていた。手を前で縛られている。顔面には殴られたような後があった。ルーチェもまた髪から手を離される代わりに蹴りを入れられ、同じように地面に倒れこんだ。ルーチェの視線に怒りが宿る。しかし、男達はそれには気が付かない。

彼らはまるで、単純作業を終えただけのような気楽さで会話を始めた。

「おい、上にはこいつ一人だったぜ」

「ご苦労さん、こっちは女一人だ」

「女か、こいつの母親か。他に家族はいないのか、父親は？」

「いないそうだ。猿轡かませる前に聞きだしたが、死んでるつてよ。上の部屋も見したが、他には誰もいねえよ」

「ならいい。この家はこれで終わりだな」

「合流してこいつら、押し込むぞ」

随分ふざけた会話だった。人の家に押し入っておきながら、よくもふざけるなよ。

ルーチェの怒りは静かに高まりきっていた。

こいつ等は手馴れている。多分、もう何度も繰り返してきた作業なんだろう。自分達を強者だと思いこんでいるのだろう。だが、それは大きな勘違いだ。

（あんた達より、私の方が強い）

猿轡の所為で声は出せない、けれど構わなかった。心の中で宣言して、ルーチェは意識を集中した。選択するのは精霊魔術。

特殊法則支配層に存在する「火霊」に精神を繋ぐと、一瞬にして精霊の意思を掌握し、ゲートから引き出した「魔力」というエネルギーを注ぎ込むことで、その存在を凝縮し強化する。

瞬く間に炎がルーチェの目の前に現れ、収束し、玄関前を照らします。

（絶対、逃がさない）

ルーチェは不自由な状態から立ち上がった。覚悟は決めていた。こいつ等は絶対に逃がさない。少なくとも半殺しにはする。多分さっきの会話からしても、こいつ等にはもつと仲間がいる。少数の泥棒じゃない。夜盗だ。

逃がしたら、まずい。

ルーチェは火球を入り口扉から10cmも離れていない場所へと浮かばせた。突然の出来事に夜盗達が慌てふためく姿が瞳に映った。しかし火の精霊に精神を接続し、その荒ぶる心に多少なりとも影響されている今のルーチェにとって、彼らの姿は害虫にしか見えない。すなわち、容赦する必要性を感じない。

ルーチェは呟いた。声は上手く出せなかったが、精霊魔術の行使に発声はいらない。ルーチェと精霊を繋ぐパスはもう結ばれているのだから。

「びいぶえ（死ね）」

無慈悲な呟きと共に、夜盗達の絶叫が響いた。火球が一層激しく燃え上がり大きくなると、分裂して夜盗達の足を燃やしたのだ。醜い悲鳴が響いた。それを聞いて、ルーチェは決断を下す。

ルーチェに男達を殺すつもりはない。だが彼らの悲鳴は余りにも煩かった。その悲鳴は誘蛾灯になる可能性がある。それはあつてはならない事だ。

ルーチェは更に火霊を操ると、夜盗達の喉を焼いた。

残酷な事をしている自覚はあった。だが、必要な処置だとも思っていた。そうして彼らが余り身動きをしなくなると、ルーチェは果然と此方を眺めていたクレアを一瞥した。

（やめてよ母さん。私をそんな目で見ないでよ。他にどうしようも無かったじゃない）

ルーチェは精霊との接続を薄くする。思考が平時の物へと戻ってくる。クレアの目に強張りを見つけて、それが自分を責める視線に感じて、ルーチェは悲しい気分になった。だけど。

だけど、後悔なら後であればいい。今ルーチェはすべき事をするべきだ。

大好きな人を守る為にも。

ルーチェはロープに縛らせた状態で母を立ち上がらせると、首を使って「ついてきて」という意思を伝えた。何度か繰り返すとクレアはその意思を汲み取って、ルーチェの後に続いた。

ルーチェがクレアを連れて台所に辿りつく。そのまま火霊を使い小さな明りを生み出すと、戸棚から後手で包丁を取り出した。包丁の置き場が高くないのが幸いした。刃が指に当って冷やりとしたが、何とか持つことに成功し、それを床に降ろすと、クレアもようやくルーチェの意思を理解したようだった。

前で両腕を縛られているクレアは、後出でしっかりと両腕を拘束されたルーチェよりも自由が利く。包丁を持つ事が出来るのだ。

包丁がクレアの手に渡る。それから数分後、ルーチェの腕の拘束はクレアの包丁によって切られた。ルーチェはそれを確認すると自由になった手で猿轡を外し、今度はその手でクレアの拘束を解いていく。

「……ふう。これで、ようやく逃げれるね。母さん、行こう」

「——待って、ルーチェ。待って。……私は母親として、謝らないといけないわ」

ようやく二人とも拘束が解けると、ルーチェは俯くクレアに手を差し出した。しかし返ってきたのは握り返す手ではなく、謝罪だ。どうして、なんでこのタイミングで？

（もしかして、もう、私と居たくない、とか？）

怖かった。ようやく人心地がついたこの時だからこそ、ルーチェの怯えは高まっていた。ルーチェの感じた怯え。それは「拒絶される恐怖」だ。

先ほどまでの、人を人とも思わないような思考は、もう出来なかった。ある種の勇ましい思考は、既に空の彼方に消えている。ルーチェは自分をクレアに「そんな人間」だと、思われなくなかった。ルーチェは怯えながら、クレアの言葉の続きを待った。

「ごめんなさい、ルーチェ」

「どっ、どうしたの、母さん。今は急がないと、ね？ 話は後で聞くから」

「いえ、後では駄目だね。私は、私は自分の娘に何て事を……」

「……母さん？」

ルーチェの身体から、自然と力が抜けた。クレアは泣いていた。それでいて震えながら、優しい手でルーチェの事を抱きしめる。

「私が、私が守ってあげなきゃいけなかったのにつ！ あんなこと、あんなことをさせてしまうなんて！」

「……いいんだよ、母さん。私は大丈夫。大丈夫だか」

「——大丈夫な訳ないじゃない！」

クレアはルーチエの言葉を遮ると、抱きしめる力を強くし、目を腫らしながら大きな声で怒鳴った。

「人を殺して、それがあんな屑でも、貴女の心が痛まない訳がないでしょう！ 強がつて、無理して、ばかよ。ほんとにばか。……何で、何でそんなに優しい子に育ったの！」

「……母さん、私は大丈夫」

「またっ、大丈夫な訳っ」

「お母さんがそう言うってくれるから、大丈夫なの」
ルーチエも抱きしめる力を強くした。

「私、いま良かったって凄く思ってる。興味本位で覚えた魔術が私たちを救える力で、本当に良かったと思ってる。もしもお母さんが死んじやったら、それが一番怖い事だったの」

「ほんとっ、ばかよ。貴女は」

「馬鹿でもいいよ。お母さんと一緒にいれるなら」

「……全く、どっちが母親が分かったもんじゃないわねっ」

そう言うところではクレアは微笑んだ。顔にアザは残るが、綺麗な微笑みだった。それを見たルーチエの中に、力が湧くを感じる。

「母さんは母さんでしょ。……さあっ、いかないと！ お話はここまでっ！ 先ずは裏口から出て、人気のない方に逃げよう。あい

つ等仲間がいるみたいなの」

「分かったわ。でも、村の人は大丈夫かしら。仲間がいるんじゃない」

落ち着くと、周りの状況が見えるようになる。外からは何時もと違う音が聞こえていた。それは悲鳴や、争いの音だ。

ルーチェは頭を横に振った。

「冷たいようだけど、今は私たちのことで精一杯だよ。……急ごう」

「……ええ。ごめんなさい」

ルーチェとクレアは立ち上がると、裏口から抜け出し森の中へと入り込んだ。正規の、獣道ですらない所から足を踏み入れた為に足場は最悪だったが、小走りで進んだ。

途中、火霊を使って明りをつけるべきかと悩んだが、クレアの意見で取りやめた。折角隠れ進んでいるのに、自分から目立つ必要はない。今夜は三日月で、月明りも強いとはいえないのだから。

二人は走った。夜の森は複雑で、怖い所だ。まるで世界に二人だけが取り残されて、魔物から逃げ惑っているようだ。そう思った。その通りだった。

ひゅんつ、と、嫌な音が聞こえた。それと同時にクレアが地面に倒れこむ。ルーチェは慌ててクレアに駆け寄った。

「何、何がっ。母さん、母さん！」

ルーチェはクレアを揺すぶった。何度か揺すぶってようやく気づく。矢だ。矢がクレアの背中に突き刺さっている。深くまで刺さっているようだ。幸いにも意識はあるようだ、その所為でクレアは

痛みに顔を歪めていた。

ひゅん。もう一度矢が飛んできた。「ああっ！」ルーチェの左肩に矢が刺さった。

痛い。痛くて泣きそうだ。殴られた時も相当に痛かったが、この痛みはそんな物じゃない。それに何より。

（これじゃあ集中が、できないっ）

大問題だった。敵が来ている筈なのに、反撃の手段が封じられた。ルーチェは自分に刺さった矢を引き抜こうと試みる。だが、無理だ。抜こうと力を入れると激痛が走る。自分じゃ抜けそうにない。そうして痛みと戦っているルーチェの前に、森の暗がりから男が姿を現した。

「逃げてんじゃねえよ。小さな魔術師さんよあ」

まさに山賊といった風貌をした巨体でつぶりとした髭面の男は、そう言くと二人に近づき、わざとルーチェの左肩を蹴った。衝撃で矢が折れたが、先端はより深く肩に突き刺さった。

「あああああっ！」

悲鳴が漏れた。肩に斧をしょった山賊男は、ルーチェの苦しむ姿を見て笑っている。

「まったく、こんな辺鄙な村に魔術師がいるなんて思わなかったぜ。しかも手下が二人も返り討ちにあっちまうなんて、笑えねえ」

やれやれといった風に両手を上向きで揺らして、山賊男は「なあ

そう思うだろう?」と後方へと声を掛けた。その声と共に、何人もの男たちがぞろぞろと姿を見せる。

「……うそっ」

「残念ながら、嘘じゃねえんだよなあ。お嬢ちゃん」

山賊男はねったりとした笑みを見せる。ルーチェの絶望を的確に感じ取ったのだろう。嫌な笑みだった。そして言う。

「お母さんを助けたくないかい?」

そう言うと、山賊男は「自分にとって」素晴らしい提案を長々と語りだした。だが、ようやくすればそれは簡単な話だった。

こいつはルーチェに、大人しく奴隷となれ、といっているのだから。

この物騒な世界で、魔術師は有用だ。それも年若い少女となれば、尚更の話し値段がつく。魔術師の女奴隷なんて希少品なのだ。

だから、母親を助けたければ、大人しくしている。それが山賊男の提案だった。

全く、ふざけた提案だ。

「そんなこと言っているのかな。私、途中で反逆するかもしれないわ」

「安心しな。世の中には『調教』を専門にした人間が存在するんだよ。半年もあればお嬢ちゃんは有能な女奴隷に早変わりさ。どうだ、いい話だろう」

山賊男の手下達が「ぎゃははは」と下品な笑い声を上げた。ほんと、最悪だ。最悪すぎて泣けてくる。でも。

（でも、もう私には、これしかないのかもしれない）

ルーチエは歯をくいしばった。屈辱だ。だが、ルーチエの命とクレアの安全を保障するには、もうそれしかないのかもしれない。

結局は、母親の未来も明るくないに違いない。けれど、それをこっちが理解していると判断した上で、この男はそんな提案をしている。見た目より頭は回るのかもしれない。最悪だった。

「一応言つとくわ。代わりに母さんを解放しなさい」

「あんたが大人しく調教を受けた後ならな」

「……覚えておきなさい、例えどれだけ自我が壊れたって、母さんに手を出したその瞬間、あんた達の命はないわよ」

「覚えておくさ。——さあ。お前ら、首輪をつける」

後ろで控えていた山賊男の手下が、鉄製の首輪を持ってルーチエに近づいてくる。ルーチエは諦めて目を瞑った。

茂みを掻き分ける音が、まるで死の宣告のように聞こえる。ただ手下達も、ルーチエの存在に怯えているのかもしれない。その歩みは遅い。いや、もしかしたら此方を怯えさせる為の演出なのかもしれない。どうでもいい事だ。

そうしてルーチエが絶望を受け入れようとしたその瞬間。

「——私の娘に触れるなああっ！——」

「ぐああっ！」

クレアが己に突き刺さっていた矢を武器に、手下の男に襲いかかった。

「……させないわ」

鬼気迫る表情のクレアが振りかざした矢は、深々と手下の首に突き刺さる。クレアはそのまま手下のベルトに吊り下げられていた短刀を奪い、更に手下に突き刺した。

「誰が、あんた達にくれてやるのですかっ！」

クレアが、吼えた。

自身の痛みなど感じていないかのように、クレアは走り出す。そして、山賊男に飛び掛った。

「あああああああっ！！！」

「ちっ、馬鹿が」

肉を裂く嫌な音がして、血が飛び散った。「……嘘」とルーチエは呟く。身体から力が抜けて、膝から地面に崩れ落ちた。

クレアが、切られた。

裂ぱくの勢いを持って繰り出された短刀には、確かに迫力があつた。だが、山賊男にとってはそれだけだったのだろう。返り討ちにされた。

腹と腕が裂かれていて、出血量は相当な物だ。素人目にも、もうクレアが助からないといけな事は明白だった。

「……嘘だ」

「くそっ、お前らっ！ さっさとこいつをふんじばれ！ いや、もういい殺せ！」

山賊男はその時、多分、正しい判断を下していた。

クレアを失ったルーチェは、首輪を失ったただの獣。彼らにとつてもう、害にしかない。「早急に始末しなければならぬ」という、その判断は恐らく間違っていない。だが惜しむらくは。

「嘘だ」

その獣の存在が、彼ら程度では賄えない程に巨大だったという事だ。

「嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だあつ！！！」

ルーチェが叫んだ。絶叫だ。耳が裂けるのではないかという声量の、聞く者の胸を突き刺すような叫び。

ルーチェの身に纏う空気が、変わった。

風がルーチェを中心として逆巻いた。森の暗闇を照らす為の、夜盗達の持つ松明の火がルーチェの下へと奪われていく。暗闇の中で、ルーチェの周りだけが炎で照らされていた。炎は収束しつつ巨大化し、その層を厚くしながらうねりを上げてルーチェの身体を包み込む。まるで繭のようだった。幾重にも圧縮されて育まれた超高温の炎の繭。そんなものに包まれていながら、ルーチェは平然と身体を保ち、虚ろな視線を月に向けていた。

もしこの場に他の魔術師がいたのなら、驚いて言葉を失くしたに違いない。この現象は異常な量の魔力を与えられ、呼び寄せられた

火霊が原因の「暴走」だ。だが、本来なら魔術師本人すら焼き尽くす筈の火霊は、まるで慈しむ様に炎の中でルーチエの身体を守っていた。普通ならありえない事だった。

夜盗の誰かが放った矢が、炎の繭に向かう。無駄だ。矢は繭に触れた瞬間、瞬時に消滅した。

「嘘だろ、おい……」

誰かが呆然と呟く。無理もない話だった。無様な悲鳴を上げて、何人もの夜盗が逃げ出そうとした。無駄だった。逃げ出した夜盗たちは、一人残らず炎の繭から延びた触手で消失した。

逃げ出さない者、腰が抜けて逃げ出せない者は、その後に触手に抱かれて消失した。

山賊男も後悔していただろう。逃げ出そうとした。けれどもそれは無駄な事だ。

「後に悔いるから、後悔」なのだから。

彼もやがて、塵一つ残さず消滅した。

世界が炎に包まれていく。何もかも飲み込んで、消し去っていく。

その日、森の一角が忽然と空き地になった。

そこには気絶する少女以外に、何一つ存在しなかった。

第四話

晴れた日のうらかな気候の中、一台の馬車がのんびりと街道を進んでいた。

外から中が見えないように、後部は丈夫な白い布が壁のように張られている。動力源となる馬は二匹。どうやら商人の物らしい。その証拠に商業組合傘下の証である金属板が、馬車の正面右手側に吊るされていた。余り大きくない、小型の馬車だ。

馬の手綱を引く御者は眠そうな目をしている。事故を起こさないか心配な所だが、その目も背の高い一本松が見えた所で静かに開いていった。御者は馬車の後部へと声を掛ける。

「おい、嬢ちゃん。そろそろ町につくぞ」

「はい」

本来商品しか入っていない筈の馬車後部から聞こえてきたのは、まだ年若い少女の声。ルーチェの声だ。ルーチェは後部から御者の肩口に顔を出した。

「そろそろって、どれ位？」

「あー、少し急げば半刻もかからねえんじゃねえか？ 急がねえけどな！」

「だったら、現在のペースで『あと少し』って所で教えてよ……」

「ははは、悪い悪い。まあ、それでも1時間はかかんないだろ。4〜50分ってところか」

「それだと『そろそろ』っていう表現は間違ってくるんじゃない？」

御者の快活な笑い声が響く。ルーシェはうんざりした表情を浮かべた。

「嬢ちゃんも、細かいこと気にすんなって。それに後どん位で着くか知ってた方が、やっぱり便利だろ」

「んー、まあ、それもそうね」

応えたルーチェの声には、どうにも納得しきれていない物が滲んだが、それでも楽しそうな御者の顔を見ると不満は湧かない。ルーチェは彼の肩を軽く叩くと再び馬車の後部に頭を引っ込めた。

ルーチェは馬車の中で一人、多くの商品に囲まれながら座り込む。そしてふと自身の皮袋を取り出した。

「……ちよつと、無謀だったかなあ」

ルーチェの村を夜盗が襲ったあの日から、一月程が経っていた。

あの日、ルーチェが「暴走」を引き起こした事により、夜盗はその構成員の大部分とリーダーを失った。その為に彼らの略奪は最小限の被害に抑えられ、拘束された村人や金品は多数放置されたのだった。お陰で村は何とか「村」としての様相を保つ事ができ、後日訪れた国の役人との話し合いでも存続が決定された。

とはいえ、死亡したり連れ去られたりで村人の残りは半数になり、放火された家も多くボロボロな状況。結局ルーチェの家も燃やされていて、ど田舎の村の廃屋となった宿屋は資産価値を殆ど失ってい

た。それ故に、思う所あつて旅立ちを決めたルーチエが家を売却しようとしても、その売却代は30万Gほどにしかならなかった。村人達からの恩情を含めた支援込み、での金額だ。

まあその後も色々とあつた訳だが……。

ルーチエは着実に軽くなつてきた皮袋の重みに、重い溜め息を吐く。今その中には、錬金術師組合が作り商業組合が認めた大陸共通貨幣「G」^{ギルド}が何枚が入っている。

硬貨としては大きめな1万G合金硬貨が20枚、5千G合金硬貨は一枚。あと小銭が幾らかといった所か。全部合わせると21万Gはあるだろう。

目的の場所には次の町で少し休憩しても、後一日程でたどり着く筈だ。路銀としては十分に足りる。だが、そのルーチエは観光目的でそこに赴く訳ではない。たどり着いた後、少なくともかなりの期間、ルーチエはその都市に留まる予定なのだ。そう考えるとルーチエの全財産は、些か心細く感じる。

「装備だつて整えないといけないし、食事代だつて高いっていうし、不安だなあ」

はあ、と再び溜め息を吐く。そこに御者から声が掛けられた。

「不安だつたら止めちまつたらどうだい」

「……え？」

御者は手綱を引いている。彼は後部を振り返らず、前を見ながらそう言っていた。

「嬢ちゃんにも理由があるんだろうがね、やっぱり俺はあんまり賛成できないよ。年頃の娘があんな所を目指すなんて」

「あんな所って」

ルーチェは苦笑した。この御者だってその場所を目指している筈なのだ。

しかしそんなルーチェの姿勢を正すかのように、御者の声には真剣味が含まれていた。

「嬢ちゃんの目指す場所、『魔界都市パンデモニウム』。名前の通り地下に広大な魔界を持つ、特殊な都市さ。治安だってよくないし、再び『混沌の日』が起きた時は最戦線になる。……なのはどうして、好き好んでそんな所に向かおうっていうんだい。嬢ちゃんは貴族でもないんだろう？」

前を向く御者の表情は見えない。この世界には貴族がいて、その権力と引き換えに『強くなる義務』を負う。だがあの事件で、結局クレアは死んでしまった。そしてルーチェは平民だ。一番大切な物を失ってしまった以上、本当は「強くなる理由」すら存在しない。けれどルーチェはその背中を想像しながら後部から答えた。

「強くなりたいから」

「ん？」

「強くなりたいから、私はあの都市を目指しているの。私は貴族じゃない。だから彼らのように『強くなる義務』はない。だけどねおじさん。義務なんかしよってなくても、私は『強くなりたい』とは思うの。こんな世界だもの、強くなかったら失ってしまう物は、沢山あるじゃない。私はもう何も無くしたくないの。弱い自分なんてまっぴらごめんなのよ」

「……そうかい」

ルーチェは素直な思いを告げた。御者はその思いを聞いて、ゆっくりと目を閉じた。

ルーチェのそれは、あの日から散々悩んで、ようやく出した答えだ。あの日の傷跡はルーチェの心にしっかりと残っている。母の死の様は今でも鮮明な記憶で、あの日の出来事は悪夢として何度も再生される。

死にたいと思った。でもそれはしてはいけないと思った。もし自分がそれをしてしまったら、ルーチェは都合のいい時だけ信じている「天国」という場所で、クレアに再会した時に顔向けできなくなってしまう。

だからルーチェは強さを求める。クレアに愛された自分は、理想の自分でいたいから。堂々とした態度で再会したいから。

——馬車はゆっくりと進んでいく。

休憩する予定の町について、ルーチェたちは一泊した。そして翌日の朝になるとすぐに出発する。

昨日とは違い馬車の速度はそれなりの物だった。ルーチェと御者は、お互いの顔を見ないまま会話をする。

「おじさん、このペースだとどれくらいで着くの？」

「あー、途中で馬を休ませることを考えても、昼過ぎには着くんじゃないかねえか？」

「そっか、分かった」

「おう、それまで休んでおきな。嬢ちゃんは暗くなるまでに、良い宿見つけなきゃならんのだからな」

「……はい」

手綱を引く必要のある御者と違って、ルーチエはただ休んでいれば目的地につく。ルーチエは御者の言葉に優しさを感じていた。

昨日までの予定では夕方に着く予定だった。それが早まったのは、御者がルーチエの都合を考慮してくれたからだ。例えそれがルーチエの話に何らかの同情を持ったからであつても、この御者が善人であるという事実は覆らないだろう。

その優しさに甘えて、頻繁に行っている魔術訓練も止めてルーチエは瞼を閉じた。馬車の振動は最初こそ辛かったが、ルーチエの足元には厚い毛布が引かれている事あり、今はただ睡魔を呼び寄せる要素にしかない。

うとうとと意識がかすみ、心地よい夢の世界に入っていく。若干寝不足な事もあり、悪夢も見ずにルーチエの意識が落ちる。

そんなルーチエに御者の焦ったような怒鳴り声がかけられた。

「くそっ！ 嬢ちゃん起きろっ、一大事だ！！！」

ぴよんと、飛び上がるように覚醒したルーチエは、布を開いて後部から御者の肩口に顔を出す。

「どうしたの！？」

「盗賊だ！ 速度を上げて振り切る、嬢ちゃんは齒を食い縛って振動に耐えててくれ！」

「……盗賊、か」

ルーチェは呟く。真剣な表情で前を見据える御者。その視線の先には、馬に乗った盗賊団がこちらに向かう姿が見えた。

数はおおよそ10。中でも先頭の馬には飾り布が付付けられていて、一際目立つようになっていた。詳しい装備までは確認できないが、軽装のように見えるし大した武器はないだろう。気をつけるべきは弓矢位か。そんな事を考えていると、先頭の盗賊が太い縄を持っているのが見えて、ルーチェは「ああ」と呟いた。走る馬車を襲う方法は簡単だ、わざわざ弓で馬や御者を射なくても、太目のロープでも馬が車輪に絡ませればいいのだ。

現在の馬車の速度だと、あと一分もかからず奴らにぶつかるとう。

冷静に戦況を確認したルーチェは、前を見据えながら自然な声音で御者に声をかけた。

「大丈夫だよ、おじさん」

「はあ！？ お前何を言ってる」

「あれ位なら、私一人でも何とかなるから」

御者は妙な物でも見るような目つきでルーチェを見た。ルーチェはその表情に少し笑うと、御者の肩に捕まりながらその後ろに立ち、意識を集中させた。

自身の霊体、アストラルボディにある心臓部「コア」を認識し、そこから「混沌」と呼ばれる、エネルギーと可能性の渦巻く異界に続く扉「ゲート」を開く。そこにパスと呼ばれる手法で精神接続を果たし、魔力を自身へと導く。

供給された魔力はそのままパスを通じて世界を構成する精霊に接続され、ルーチェに彼らと同調し支配する事を可能とさせる。

ルーチェの髪が、ふわりと揺れる。周囲で陽炎が現れ、温度が一気に上昇した。春の陽気から夏の陽気へと、その変わりようは通常ではありえない物だ。御者は首を曲げて、自身の肩に手を置くルーチェに言葉を投げた。

「嬢ちゃん、——魔術師だったのか」

「うん、そうだよ」

ルーチェの右手が御者の肩から外れ、前方の盗賊団へと向けられる。御者には急に高まった周囲の温度が、その動きと共に全て消えうせたように感じた。間違いだった。それは全てルーチェの右掌、そこに収束されたのだ。

ルーチェの掌の先には彼女の頭部程の大きさの火球が、うねりを挙げていた。その輝きを赤と白の間で変える火球には、どうやら回転が加わっているらしい。

「——りゃあっ！」

気合の声と共に、ルーチェの掌から火球が放たれた。それは見事先頭を走る盗賊の馬にぶつかり。

爆ぜた。

馬は爆散し、乗っていた盗賊は飛んだ。というか彼(?)を構成する大部分も消し飛んで、その残骸は当然のように後続の盗賊団に飛散し、彼らを一瞬にして大混乱に陥れた。

「つて、ちよつと待てえええっ!!!」

御者は叫んだ。手綱を全力で操り進路を更に変更し曲がるように

馬車を進める。盗賊団との激突まであと50メートルを切った距離で大混乱が起きて、その距離がぐんぐん縮まったらどうなるか。

要するに、ぶつかる。大激突。ゲームオーバーだ。これでは何の意味もない。

後ろでルーチェも引きつった笑みを浮かべていた。その表情は予想外だったことを物語っている。要するに対処法も考えていないということだ。それはつまり、自分の命を守るのは自分だけということか。御者は吼えた。本人はそのつもりだが、実際は泣き声に近かったりした。

妙な展開で命の危機を乗り切った御者は、この時二度と己の馬車にルーチェを乗せない事を決めた。

ぎりぎりの所で二人と一頭の命は守られたのだった。

「えーと、色々とごめんなさい。それと、ありがとう」

「……いーってことよ。嬢ちゃんも頑張りな。『色々』と気をつけてな」

二人は都市を覆う、巨大な城壁の門前で別れの挨拶を済ませていた。御者は明らかにその顔に疲れを滲ませている。

色々あったが予想通り、お昼を過ぎた辺りで馬車は遂にその目的地にたどり着いたのだ。魔界都市パンデモニウム。その場所へ。だからここでお別れだった。巨大な城壁には巨大な五つの門があるが、馬車に商品に乗せた御者と一般人のルーチェでは、入国に掛かる時間も違う。

そもそもルーチェは人のよさそうなこの御者に無理を言って、碌に事情も話さずここまで連れて来てもらったのだ。これ以上の迷惑はかけられなかった。

ルーチェは僅かな寂しさを滲ませた声で言った。

「うん、ありがとう。おじさんも頑張ってね」

「おう。っていい加減、その『おじさん』呼ばわりはいい加減止めてくんねえか？ 俺まだ28才なんだけだよ」

「……え、でも28って、私と二倍は歳が違っただけど」

「……ちっ、なら名前で呼べや」

ふて腐れた表情で御者が呟いた。その表情がおかしくて、ルーチエは微笑んで頭を下げた。

「——ありがとう、ティガーさん」

「おうよ」

照れたようにティガーが答える。その顔がとても名残惜しかったから、手を振るとルーチエはもう、振り向かずに一般用の受け付けへと向かった。

待ち時間を含め二時間経って、ルーチエは受付の若者から入国許可証を得た。カード状のそれと幾つかのパンフレットを受け取ると、ルーチエは前へと足を進める。

ヨーロッパ風の、でもどこか雑多で近代的な町並み。そこはもう魔界都市パンデモニウム。様々な人間が人種を問わず集まる場所だ。金の為、名誉の為、強くなる為、その理由は千差万別だろう。

ルーチエもここで生きていく。心に自分の理由を秘めて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9987w/>

神造世界のルーチェ

2011年11月29日12時17分発行